

ヴァイシニーシカ学派の数体 (saṃkhyā) 論

一、元啓

一、序

1) ヴァイシニーシカ学派に於ける数体

三、数体理論の展開——特に複数観念の獲得に就いて

A

知覚が「数体を生ずること」に就いて

B

知覚の消滅によって「数体が消滅すること」に就いて

C

知覚の過程に就いて

D

知覚の非同時性に就いて

四、結

一、序

古代インドにおいて、数を象徴的、あるいは純実用的な見地から論ずるのではなく、数観念なるものを我々が如何にして獲得するかという問題を純粹に理論的・体系的に追究した文献は余り豊富ではない。「自然哲学」を以て知られるヴァイシニーシカ哲学の文献がその類としては唯一の資料であると言つても過言ではなかろう。本稿はヴァイシニーシカ哲学の最古の画期的綱要書『प्राशास्त्रपादब्धाष्य』(Praśastapādabhbhāṣya) の記述を中心

にして、回哲学の一見難解そうな理論展開を解明するに力を田的である。

1) ヴィணダニカ哲学に於ける数体

ヴィணダニカ哲学体系に於いて samkhyā (漢訳：数) は二十四の性質 (guna) の一つに挙げられてゐる。本稿はこの様な性質の一つとしての samkhyā が語に對して「数」ではなく、仮に「数体」という訛語を与えていふが、その理由は以下的事情による。

PBh. では samkhyā は次の様に定義されてゐる。

「samkhyā とは、一等の日常的行為の原因のひとつである」

註釈に「ねば、」の「日常的行為」 (vyavahāra) が、「概念」 (jñāna, pratyaya) と「言語表現」 (śabda, abhidhāna) の両者を示すものである。やだねむか、我々が「一」 「二」 と頭の中で考へ、言葉として口に出してゐるを数える場合、そのよんだ行為を成立せしめる何ものかが存在し、それが samkhyā と称せられるとするのである。エヤネバ、「一」 (eka) 「二」 (dvī) たゞ「数」観念、「数」の言語表現を成立せしめるものを「数」と訳すところには問題があると思われる。ヴィணダニカ学派の samkhyā は数を数たりしめるものであり、ある意味で形相的な性格を有するものである。個々に samkhyā を聞くなどは、「一」 (eka) なる数を数たりしめる ekatva (一) だねるべく ねらへ、「二」 (dvī) なる数を数たりしめる dvitva (二) だねるべく ねらへ。よひい、訳語としては「数原型」あたりが適当かも知らうが、やや煩雑なので、本稿では「数体」を仮の訛語とした。

ekatva, dvitva 等の二元に応じて「一数体」「二数体」と表記する。

III、数体理論の展開——特に複数観念の獲得に就いて

ヴァイシューラ学派の数体理論では、一数体(ekatva) 二数体(dvitva) 以上の数体とは明確に区別して扱われる⁽⁴⁾。

まず、一数体は一つの実体に内属するものであり、その実体が常恒であれば常恒、非常恒であれば非常恒である。これは知覚とは関わりなく純客観的に事物の側に存すると考えられ、それを知覚する」とは、単にその一数体と感官が接触するだけで成立する。

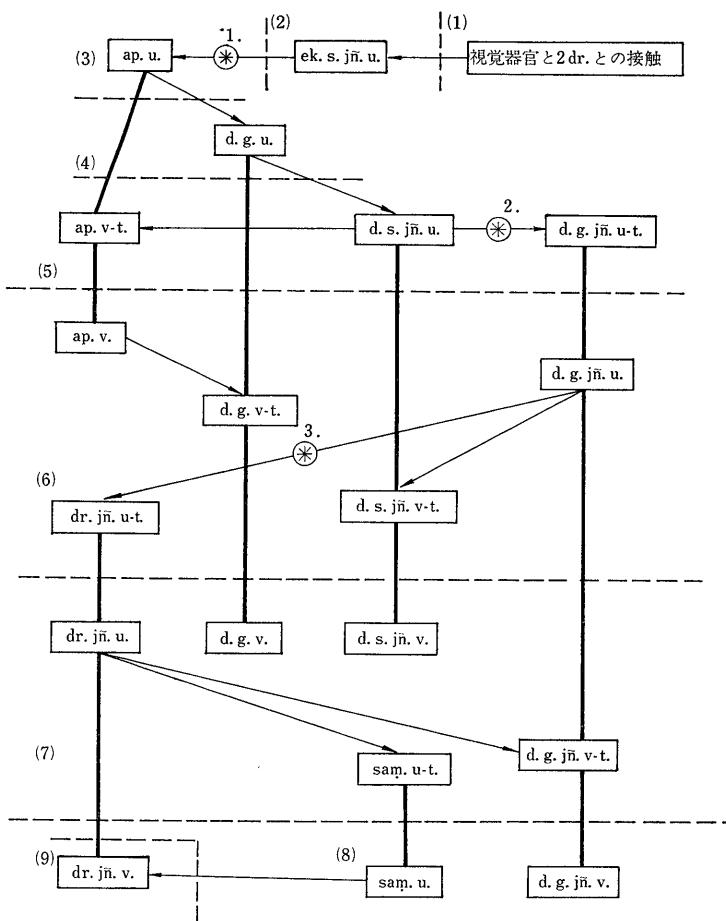
これに対して、二数体以上の数体は二以上の実体に内属するものであつてすべて非常恒である。ところが二数体等は知覚とは関わりなく事物の側に存するとは考えられない。何と何を数えるかは全く各人の主觀に俟つより外にはない⁽⁵⁾。つまり、選択という主觀的な行為を介して始めて二数体等が二以上上の実体に内属するものとして登場し、かかる後、その一数体等を対象として知覚が生ずる、という過程を想定せざるを得なくなる。

PBh 等はこれに就いて、「一数体の発生・消滅の理論を以て、次の様な過程を想定している。(図表参照)

(1) 視覚器官(caksus) ～二つの実体(dravya) ～が接觸(samnikarṣa) やる。

(2) 一数体一般(ekatvasamanya) の知覚(jñāna, buddhi) が発生する⁽⁶⁾。

(3) 一数体一般、一数体一般と一数体(ekatva) との關係(sambandha)、一数体一般の知覚(以上三者) によって、



ek. ekatva	ap. apekṣābuddhi	ex. d. g. jñ. v-t.
d. dvitva	u. utpatti	
dr. dravya	u-t. utpadyamānatā	dvitvaguṇajñāna-
g. guna	v. vināśa	vinaśyattā
s. sāmānya	v-t. vinaśyattā	
jñ. jñāna	sam. sam-skāra	

「11の1数体を対象とする知覚（契機⁽⁸⁾：apekṣābuddhi）が発生する。

(4) その知覚を契機として (apekṣya) 「11の1数体から、その基体 (āśraya) (11の実体) に於て、1数体 (dvitva) が発生する。⁽⁹⁾

(5) 1数体一般 (dvitivasamānya) の知覚が生ずる。同時に、(3)で発生した知覚が向消滅状態 (vinaśyattā)⁽¹⁰⁾ に達する。同時に、1数体一般、1数体一般と1数体との関係、1数体一般の知覚 (以上三者) によつて、1数体の知覚が向発生状態 (utpadyamānatā) に達する。

(6) (3)で発生した知覚が消滅する。同時に、1数体が向消滅状態に達する。同時に、1数体の知覚が発生する。同時に、1数体一般の知覚が向消滅状態に達する。同時に、2数体、2数体と11の実体との関係、1数体の知覚 (以上三者) によつて、「11の実体」 (dvē dravye) なる知覚が向発生状態に達する。

(7) 「11の実体」なる知覚が発生する。同時に、1数体が消滅する。同時に、2数体一般の知覚が消滅する。同時に、「11の実体」の知覚かの潜在的形能力 (saṃskāra) が向発生状態に達する。同時に、1数体の知覚が向消滅状態に達する。

(8) 潜在的形能力が発生する。同時に、1数体の知覚が消滅する。

(9) 「11の実体」なる知覚が消滅する。)

以上が潜在的形能力に転化するまでの1数体の発生・消滅の過程であるが、この様な過程の想定を可能にする、乃至要請する幾つかの主要な理論的根拠を以下に明らかにしたい。

A、知覚が「数体を生ずる」とに就いて

前述の過程(4)に於て、「数体と」う外的対象が知覚（すなわち契縁知：apekṣabuddhi）によって発生するにぎふて、これは当然考察の対象となる。

シヨリーダラ（Śridhara）はまず次の様に問題を處理しようとする。すなわち、知覚から外的対象（bāhyārtha）が生ずる」とは世間的な常識を超えるもの（alaukika）ではなく、むしろ経験的に認められるといふのである。⁽¹³⁾しかしれに対しても次のように反論が加えられる。

「[U] の ([1]数体なる) 性質 (guna) の所縁 (ālambana) ([つまり実体]) が「数体を顕現せしめる」の (abhi-vyāñjaka) であることは確定的であるが、知覚は直接の規定因 (ānantaryaniyama) ではあり得ない。」⁽¹⁴⁾

ソルジンヨリーダラは論式を以てこの問題に対する正式の解答とする。

〔P〕 「数体は知覚より生ずるものである。

〔H〕 なぜなら、（「数体は」必ず唯一人の認識者によつてしか知られないからである。

〔U〕 およそ必ず唯一人の認識者によつてしか知られないものは全て知覚より生ずるものである。例えば快感等の様に。

〔Up.〕 二数体もまた必ず唯一人の認識者によつてしか知られない。

〔N〕 故にこれ（「数体」もまた知覚より生ずるものである。⁽¹⁵⁾

ウダヤナ (Udayana) は同様の趣旨の論式を述べるが、もう一つ別の論式を示している。

〔P〕 契機知は一数体を生ぜしめるものである。

〔H〕 なぜなら、(契機知は一数体を) 顯現せしめるものではなく、かつ現にそれ (一数体) を付き随わせるからである。

〔U〕 例えば音声に対する結合と分離の様に⁽¹⁷⁾。

この様に知覚が外的対象を生ぜしめることは一数体の場合必ず要請されなければならない。すなわち、外的な事物の側に存する数体は、先にも触れた如く、知覚の介入しない限り一数体以外のものではあり得ない。ヴァイシューンカ哲学によれば、我々はあらかじめ事物の側に存する一数体等を知覚することによって二等の数観念を獲得するのではなく、知覚によって一数体等を生み出し、然る後にその一数体等を改めて知覚して初めて二等の数観念を獲得するのである。

しかし、この場合注意して置かなければならないのは、知覚が外的対象たる一数体を生み出すというのは決して知覚が一数体の内属因 (samavayikarana) (=質料因) であることを意味するのではないといふことである。そもそもヴァイシューシカ哲学に於ては、性質である知覚が同じく性質である一数体の内属因となることは許され得ない。⁽¹⁸⁾ ヴィヨーマシヴァ (Vyomaśiva) 等も明記する如く、一数体の内属因は一つの实体であり、非内属因 (asamavayikarana) は一つの一数体である。そして知覚はもう一つの原因、すなわち動力因 (nimittakarana) に外ならないのである。⁽¹⁹⁾

B 知覚の消滅について二数体が消滅するに就いて

前述の過程(6)に於て、二数体発生時の動力因であつた知覚（すなわち契機知 *apekṣābuddhi*）が消滅するに就いて二数体が向消滅状態に達し、その後過程(7)に於て消滅すると説かれてゐる。これに關しては、性質は動力因の消滅によつて消滅することがあり得るのか、といふ一般的な形で問題が提起される。例えば布 (*pata*) はその内属因である糸 (*taṇtu*) が消滅すれば消滅するが、梭 (*turi*) 等の動力因が消滅しても何ら影響を蒙らない。

シヨリーダラばんの問題に対しても特に理論的に解答してはいない。彼によれば性質が動力因の消滅によつて消滅を來すのは経験的な事実 (*dṛṣṭa*) である。その例証として彼は解脱の場合を擧げる。すなわち、解脱 (*mokṣa*) を獲得する状態に達した時、解脱の寸前に存する最後の真知 (*antyatattvajñāna*) が、身体 (*śarira*) の消滅によつて消滅する。⁽²⁰⁾ この場合、真知は性質であり、身体は動力因であるといわれる。

これに対してもウダヤナは次の様な論式を用いている。

〔P〕 二数体は動力因の消滅によつて消滅する。

〔H〕 なぜなら、(1) 数体は、その) 基体 (拠所たる一つの実体) が消滅する) としない、かつ、両立を許さない

、他の性質が出現することがなくとも、性質であるにもかかわらず消滅するからである。

〔D〕 例えば (解脱の寸前に存する) 最後の知の様に⁽²¹⁾。

C 知覚の過程に就いて

過程(3)（図表の⁽¹⁾）に於て一数体の知覚は、一数体一般の知覚に先行される。過程(5)（図表の⁽²⁾）に於て、「一数体の知覚は「一数体一般の知覚に先行される。」⁽²¹⁾に過程(6)（図表の⁽³⁾）に於て、「11つの実体」なる知覚（以下時とし）⁽²²⁾單に実体の知覚と述べる」とあるが、は「一数体の知覚に先行される。

」の様に知覚の過程は必ずその対象の内属階梯の高いものから順次に下降するものとされている。この規則の適用によつてヴァイジョーシカ哲学に於ける「一数体の発生・消滅の過程の叙述が一見複雑な様相を呈しているのである。しかしながら、ヴァイジョーシカ哲学にとって「」⁽²³⁾れば決して気まぐれの過剰想定ではないのである。何となれば、ヴァイジョーシカ哲学に於ける知覚論に目を向けるならば、」の規則は必然的に要請されるものであるという」とを我々は認めざるを得ないからである。

周知の如く、ヴァイジョーシカ学派では知覚（pratyakṣa）を1種に分類する。ひとつは非概念知（nirvikalpaka-pratyakṣa）であり、未だ概念化作用を受けず、言語とも結びつかない段階の知覚である。そしてひとつの概念知（savikalpaka-pratyakṣa）であり、既に概念化作用を受け、言語とも結びついた段階の知覚である。この概念知は、もとより、限定要素（vīśeṣa）によって限定されたもの（vīśiṣṭa）の知覚である。⁽²⁴⁾例えば「牛」（go）という形の知覚もそれに当たる。「牛」の知覚とは「牛一般」（gotva）によって限定されたものの知覚に外ならないのである。

本稿で問題にしている「二数体の発生・消滅の理論」として最も古く、かつ最も重要な資料を提供している PBh に於て、非概念知、概念知という成熟した術語による知覚の分類は見られないが、内容的には明らかに相当すると思做し得る分類がなされている。⁽²³⁾ すなわち、前者は「単なるもののものの知覚」(svarūpālokanamātra)、後者は「普遍・特殊・实体・性質・運動という限定要素に依拠する、靈魂と内官の接触から生ずる」⁽²⁴⁾ (saṁānya-viśeṣa-dravya-guṇa-karma-viśeṣanāpeksād ātma-manah-sannikarṣat pratyakṣam utpadyate) として體現されていふ。

「」の様な知覚論を踏まえた上で、二数体の発生と消滅の理論を以下に検討しよう。

まず、「二数の実体」なる知覚に就いて見れば、「」いや得られる知覚は単なる実体のみの知覚ではなく、明らかに何らかの限定要素(viśeṣaṇa)によって限定されたもの(viśiṣṭa)の知覚である。それは例えば、「杖を持つ人」(daṇḍin) という知覚の場合、「」の知覚は単なる人のみの知覚ではなく、杖という限定要素によつて限定された人の知覚であるとの同様である。

シユリーダラは次の様な論式を用いている。

[P] 「二数の実体」なる知覚は限定要素の知覚に先行される。

[H] なぜなら、(その知覚は) 限定されたものの知覚だからである。

[U] 例えば、「杖を持つ人」なる知覚の様に。

かくの如く、限定されたものの知覚である以上、その知覚は必ず限定要素の知覚に先行されなければならないとする。つまり、限定されたものの知覚の場合、限定要素の知覚はそれに対しては原因ということになるのである。かくして、この「一一の実体」なる知覚に先行する限定要素の知覚は自ら明瞭に想定され得ることになる。すなわち、二数体なる性質の知覚がそれである。また、二数体の知覚が実体の知覚に先行して存在することは、逆にそのことによつて保証されるのである。全く同様にして、二数体の知覚に先行する知覚は二数体一般なる普遍の知覚であり、逆に後者が前者に先行して存在することがそのことによつて保証される。⁽²⁸⁾

といふや、今まで述べ來つた限りに於ては、限定要素の知覚は、限定されたものの知覚とは一応別個のものとして先行して存在するとされた。しかし、別の前提に立つた時には、兩者の非同時性は認められなくなる。

シユリーダラは次の様な異論を紹介する。

「ところで、『限定要素と限定されるものは同一の知覚の対象である』と称する人々にとって『香りのよい旃檀』（という知覚）の場合如何なる事態が生じてゐるのであらうか。すなわち、視覚器官は香を対象とせず、嗅覚器官は実体を知覚しない（見ない）。したがつて両（感官）は（両対象の）関係を知覚しない。……（略）……」の両対象（芳香と旃檀）は、視・嗅覚器官が同時に生起して生ずるものであらう。このことは両原因（両感官）の能力によるのである。⁽²⁸⁾」

彼はこの異論に対し、知覚は部分を有しない（nirbhāga）、もしま異論の通りであるとすれば、知覚が部分を有

する (sabha^{ga}) ことになり、視覚、嗅覚等が同一知覚の内部で錯綜して混乱を来す、という様に論駁を加え、次
の様な論式を提出している。

〔P〕 論争の的となつてゐる、限定されるものの知覚は、ただ限定されるものを対象とするものでしかない。
(限定要素をも同時に対象とする)とはない。)

〔H〕 たゞなら、(その知覚は) 知覚 (pratyaksha) であり、かゝ、限定されるものの知覚 (cintāna) だから
ある。

〔U〕 例えは、「香りのよい旃檀」という知覚の様に⁽³¹⁾。

しかし、「限定されるものを対象とする」という点に關しては、その具体的な意味をめぐつて次の様な反論が打
か出される。

「もしも、單なる実体そのものが限定されるものの知覚の対象 (ālambana) であるとすれば、仮令限定要
素が存在しない場合に於ても、同様の知覚 (pratyaya) が可能であらう。また仮令、限定要素は(限定されるも
のの知覚を) 生ずるものであるから、それが存在しなければ限定されるものの知覚が生ずることがないことにな
ってしまう (考へられる) しても、これ(限定されるものの知覚) が実体そのものの知覚 (pratyaya) と異なる
ことはない。なぜなら、対象が異なるならば、知覚も別に異なることはないからである」⁽³²⁾。

「限定されるもの」を「実体そのもの」と見做せば反論の如くになるが、シユリーダラは、この知覚の対象は飽
くまでも「実体そのもの」とは異なる「限定されたもの」 (visiṣṭa) でなければならぬとある。「限定されたもの

やあ॒सु॒स्त्रा॑ (vīśiṣṭātā) は（あのの）本性 (svarūpa) が生じて異なつたものである。」例へば「杖を持つ人」(dandīn) の知覚の場合、対象は単なる人(puruṣamātra) であるれば単に杖と結合していられる (danda-saṃyogitā-mātra) であるべく、杖が付属していられる (daṇḍopasaranajatva) とするより他の人々と異なつて (vilakṣana) 人に外ならないのである。この故にこそ限定要素 (vīśeṣaṇa) は決定要素 (vyavacchedaka) が称されるのである。

さて以上のことを基へして、體程⁽³⁾（図表の※）、體程⁽⁵⁾（図表の※）、體程⁽⁶⁾（図表の※）を検討しよう。

まず、體程⁽³⁾に於て、PBh は次の複合語を用いてゐる。

ekatvasāmānya-tatsambandha-jñānebhyaḥ
(4)

シテヨーダーハば、「限定要素の知覚は限定されぬものの知覚の原因である。そして、一一の一数体は限定されるのであり、一数体一般は限定要素である。したがつて、まず初めにそれ（一数体一般）に対してもそ知覚が（生ずる）べきである」と述べた後、この複合語を次の三者に分解する。

- ① 一数体一般 (ekatvasāmānya), ② やれ (tad), ③ もう一数体一般の、一数体なら性質との関係 (sambandha), ④ 知覚 (jñāna)

この知覚が一数体一般の知覚であることは文脈上明らかである。

ウダヤナの解釈も同様であるが、②の関係を内属関係 (samavāya) であると思ふとしている。

ヴィヨーマンヴァによる複合語の分解も同様であるが、②③が具体的に何を指すのかと云々とは直接述べられていない⁽³⁹⁾。しかし、この直前に、限定要素の知覚は、限定されるものの知覚の原因であるから、それよりも先に生ずる、と述べていることから、③が「数体一般の知覚である」とが知られる。

次に、過程⑤に於て、PBh は次の複合語を用いている。

dvivasāmānya-tatsambandha-tajjnānebhya⁽⁴⁰⁾

シヨリーダラの解釈は次の通り。

①「数体一般 (*dvivasāmānya*)」、②それ (*tad*) ③「1[数体なる性質との関係 (*sambandha*)」、④知覚 (*jñāna*)⁽⁴¹⁾。ウダヤナも分解の仕方は同様だが、具体的な註記を与えていない⁽⁴²⁾。

ヴィヨーマンヴァは、②の「それ」を「1[数体一般」と置き替え、③を「1[数体一般の知覚」としている⁽⁴³⁾。

次に、過程⑥に於て、PBh は順序を少し入れ替えた次の複合語を用いている。

dvivagūpa-tajjnāna-sambandhebhya⁽⁴⁴⁾

シヨリーダラは併し註記を加へないが、この次のように分解する。

①「数体なる性質 (*dvivagūpa*)」、②それ (*tad*) の知覚 (*jñāna*)、③関係 (*sambandha*)⁽⁴⁵⁾。

ウダヤナは、性質の知覚が実体の知覚を生ずるとし、②が「数体なる性質の知覚である」と示唆している。また、「限定要素 (1[数体なる性質])」、およびその関係 (*tatsambandha*) に就いては先に既に確定していて、他に必要なかの (*apekṣanīyāntara*) は存在しないから⁽⁴⁶⁾……」

ところ様に、「関係」は過程⁽³⁾の場合と全く同様であるといふが如し。これに従えば、③は、一数体なる性質と実体との関係と解釈して差支へだ。

ヴァーヤシヴァは、「先述通り」(tathokta) ところ終飾語を付けて同様の分解を行なつてゐる。

以上検討しておたゞより、限定されたものの知覚(viśeṣya-jñāna) が生ずる原因は、次の三種として定式化することができる。やだね。

- (i) 限定要素 (viśeṣaṇa)
- (ii) 限定要素と限定されたものの関係 (viśeṣaṇa-viśeṣya-sambandha)
- (iii) 限定要素の知覚 (viśeṣaṇa-jñāna)

である。

ところで、カトイシヒーシカ学派の知覚論に於けるの様な[[原因](kāraṇa-traya) の定式化は、直接には VS 8, 9 の起句に基づくものであると推測される。

VS 8, 9 は次の通りである。

「因屬の如くの知覚か、由ゆの知覚か、由ゆの知覚がある。その1つは因果関係にある。」(samavāyinah svātyāc chvaiṭya-buddheḥ śvete buddhis te kārya-kāraṇa-bhūte)

この定句に対して、諸註釈書は次の様な解釈を行なつてゐる。

まず、CA は次の様に解する。

「白色なる性質に内属する白色一般なる普遍から、そして白色一般なる普遍の知覚から、白色なる性質の知覚が生ずる。普遍と性質との関係も留意されねばならない。この故に、限定要素の知覚は原因であり、限定されるものの知覚は結果である。⁽³⁾」

先述の三原因のうちこの直接述べられてゐるのは限定要素の知覚だけであるが、V.y. では次の様にすべて打ち出されている。

「『内属している……から』 = 白色なる性質と実体との関係から、『白色から』 = 白色なる性質から、『白色の知覚から』 = 白色なる性質の知覚から、『白いもの』 = 白色なる性質によつて限定された布の知覚が生ずる。このことは他の場合においても（通用する）。『そのいい』 = 限定要素と限定されるものの知覚、および限定要素の知覚と限定されたものの知覚、は『因果関係にある。』（このことは）兩者の有無関係⁽⁵⁾を補助とする知覚によつて確定される。なぜなら、限定要素と（限定されるものと）の関係・限定要素・（限定要素の）知覚があれば限定されたものの知覚が生じ、（前者が）なければ（後者は）生じないからである。⁽³⁾」

Upas. も同様に解する。

「……かくして、『白い法螺貝』等の知覚の場合、白色の内属と、白色なる性質と、白色なる限定要素の知覚とが原因であると言わたのである。かくして、限定要素と（限定されるものと）の関係・限定要素・その知覚は、限

定されたものの知覚といふ正しく認識に対しても原因であると（言われたのである）。……」⁽⁵³⁾

以上の如く、VS 8. 9 は限定されたものの知覚 (viśiṣṭa-jñāna) の構造を示すものとして、所謂「[[原因]] (kāraṇa-traya) 理論の基礎をなすものである。

アーラシャスタペーダも、過程(3)(5)(6)の様に、明らかにこの理論を前提としているのである。現に彼は同じ「数体章」 (saṃkhyā-prakarana) の中で VS 8. 9 を引用している。彼がこの定句を引用していく個所は、本稿の次の D 節で扱う論議と関わりがあるので、要するに、「[一]数体 (性質) が既に消滅して存在していなくとも、[二]数体の知覚が存在していれば、それだけからでも実体の知覚が生ずる」とは可能である」とする見解を斥ける個所である。

該定句を引用する前に、彼は次の様に述べる。

「なぜなら、限定されるものの知覚は、（限定要素と）同類であるため、限定要素との関係なしには存在し得ないからである」⁽⁵⁴⁾

アーラシャ 「同類である」 なら (sārūpya) ならば、ウタヤナによれば「同質性」 (sadharma) 「同格關係」 (sāmanā-dhikaranya) へ同義である。⁽⁵⁵⁾ まだ、ショリーダラによれば、これは、限定されるものの知覚は限定要素によつて染ぬられたる (anurakte) なら、逆に言えば後者は前者を染めてくる (anurakti) なら、やむなし、限定要素は限定されるものの本質 (svatūpa) であるから、限定されるものの本質が付属してくる (svopasarijanata) を知

覚させる原因 (pratiti-kāraṇa) であることを示す。といひが、現に存在していないものにはそのようないことはあり得ない。したがひ、「[1]の実体」なる知覚が限定されるものの知覚である以上、その実体の限定要素である[1]数体なる性質は、「[1]の実体」なる知覚が発生する際に必ず存在していなければならぬ。

PBh や「のすぐ後に引用される VS 8. 9 は「プラシヤスター自身は何ら註釈を施していないが、今までの考察から、彼がこの定句を「[1]原因」理論の確定材料として引用していると見做す」とが出来よう。

因に、この定句に対する KA, NK, VV の解釈は、先に紹介した CA, Vy, Up. のそれと基本的に何ら異なるない。

D 知覚の非同時性に就いて

ヴァイシューシカ学派の数体の発生・消滅の理論は、多くの知覚 (jñāna) が同時に存在し得ない、という原則に立脚している。勿論、これはヴァイシューシカ学派が内官 (manas) を單一で微小なものであるとすることが基礎になっている。

ところで、同時に存在し得ない、両立し得ない (virodha) とは如何なる状態を指すのであらうか。PBh によれば、それには二つの場合が考えられる。一つは、文字通り「共存不可能」 (sahānavasthāna) となる場合であり、一つは「殺されぬものと殺やめる」 (vadhyagṛhātaka) という場合である。仮に A と B の二者があって、A が先に存在するものとしよう。「共存不可能」という場合、B が発生した瞬間には既に A は消滅している、つまり A と B が

同時に存在することは文字通り全くないことになる。これに対して「殺されたものと殺すもの」の場合、AはBが発生した瞬間に次の瞬間に消滅する、つまりAとBとは一瞬間だけは同時に存在することになる。

では、数体論に於ける知覚の場合はそのいずれであろうか。これは図表からも一見して理解出来る様に、「殺されるものと殺すもの」の場合である。理由は以下の如くである。

もしも知覚の不両立が所謂「共存不可能」を意味するとすれば、ヴァイシューシカ学派の知覚論の構造上、数体論が破綻を来す結果になるのである。すなわち、二つの知覚が同時に存在することは全くあり得ないのであるから、過程(5)に於て二数体一般の知覚が生ずると同じ瞬間に契機知は消滅しなければならない。契機知が消滅するのであるから、やはりその同じ瞬間に二数体が向消滅状態に達する。したがって、次の瞬間に二数体の知覚が生ずるのと同時に二数体は消滅する。かくの如くであると、「二つの実体」なる知覚が生ずるために必要な原因が、この瞬間に於て欠如していることになり、「二つの実体」なる知覚は遂に生じ得ないという帰結に陥ってしまう。つまり、先述の如く、この実体の知覚は限定されるものの知覚である以上、その発生のためには、「三原因」(karapratraya)がなければならない。すなわち、(i)二数体、(ii)二数体と実体との関係、(iii)二数体の知覚の三原因である。しかし今見た様に、(i)が、したがつて(ii)も欠如していることになり、実体の知覚も生じ得ないのである。よって、知覚の場合には「共存不可能」説でなく、「殺されるものと殺すもの」説が採られねばならないのである。

四、結

以上、ヴァイシーシカ学派の数体論に若干の考察を加えてきた。数体論は PBh の中でも最も難解なものの一端であるが、少くともヴァイシーシカ学派の諸原則は非常に厳密に守られてゐるといふが理解出来よう。しかし、その議論世界の中に於ては、巧みに計算し尽された、極めて首尾の一貫したものであると謂ふべし。この数体論を見複雑なものにして居るのはヴァイシーシカ学派の知覚論、それも、限定されるものの知覚 (*vīśeṣyajñāna*) に関する「[[原因]]」理論である。したがつてヴァイシーシカ学派の数体論の要是知覚論にあるといふべし。實際、論争史上数体論に対する批判は結局知覚論に対する批判に集約されてゐる。特に NK ではない点に關する仏教徒との論争に長大なスペースが割かれている。⁽³⁵⁾ この論争には、ヴァイシーシカ学派の数体論を通して同学派の哲学体系の根幹に触れる重要な問題展開が見られるのであるが、その検討は本稿では割愛し、他日を期したい。

(日本学術振興会奨励研究員)

参考書

- CA: *Candrānanda's Vṛtti ad Vaiśeṣikasūtra (Vaiśeṣikasūtra of Kanṭada with the commentary of Candrānanda, ed. by Jamadvijayāḥ, Gaekwad's Oriental Series No. 136, Baroda: Oriental Institute, 1961).*
- KA: *Udayana's Kiranāvali (Kiranāvali of Udayana)*.
- carya, ed by Jitendra S. Jetly, Gaekwad's Oriental Series No. 154. Baroda: Oriental Institute, 1971.
- NK: Śridhara's *Nyāyakandali (Prasastapadabhaṣya with Commentary Nyāyakandali of Śridharabhaṭṭa*, ed. by Kṣetresachandra Cattopadhyaya, Gaṅgānātha Jhā Granthamālā Vol. 1. Varanasi: Varanasya Sanskrit

Vishvavidyalaya, 1963).

NS: *Nyāyasūtra* (*Śrīgautamamuniprakarayājasyasūtrāṇi*, ed. by Digambara Śāstri. Ānandaśrama Sanskrit Series

91. Poona : Anandaśrama Press, 1922).

PBh: *Prasātapaṭadabhaṣya* (the same as NK).

SDS: Mādhaba's *Sarvadarśanasaṃgraha* (*Sarva-Darśana-Saṃgraha of Sāyaṇa Madhava*, ed. by Vasudev

Shastri Abhyankar, Poona : The Bhandarkar Oriental Research Institute, 1924).

SM: Viśvanātha's *Siddhanātmatkāvati ad Kārkāvati* (*Kārkāvati*, ed. by Naṭayana Tīrtha. Kashi Sanskrit Series 16. Benares : Jaykrishna Dās Gupta, 1923).

TBh: Kēśavamīśra's *Tarkabhaṣa* (*Tarkabhaṣa by Kēśavamīśra*, ed. by Narayan Nathaji Kulkarni, 2nd Ed. Poona : Oriental Book Agency, 1953).

TS: Annambhatta's *Tarkasaṃgraha* (*Tarkasaṃgraha of Annambhatta*, ed. by Y. V. Athalye, revised and enlarged, Second Ed., Bombay Sanskrit Series No. L V, Poona : Bhandarkar Oriental Research Institute, 1974). Upas. : Śaṅkaranīśvara's *Upaskṛta ad Vaśeśikasūtra* (*The Vaśeśikā Darśana*, ed. by Jayanāṭayana Tarka Pan-

chānana, Biblioteca Indica, Calcutta : Asiatic Society of Bengal, 1861).

VS: *Vaiśeṣikasūtra* (the same as CA).

VV: Vyomaśiva's *Vyomavati* (*The Prasātapaṭadabhaṣya* with a commentary *Vyomavati*, ed. by Gopinath

Kavirāj and Dhundhirāj Shastri, Chowkhambā Sanskrit Series No. 396, Benares : Chowkhambā Sanskrit Series Office, 1931).

Vy.: *Vyākha* (*Vaiśeṣikadarśana of Kaṇāda with an anonymous Commentary*, ed. by Ananthalal Thakur. Darbhanga : Mithila Institute of Post-Graduat Studies and Research in Sanskrit Learning, 1957).

註

(→) ハトベヒー・ハニカ派の saṃkhyā 論調は甚だ複雑で、同派の語原論は精通してないため略説に理解され難い。やむだね、11世紀頃には次の様な俗謡が一般に流傳するなどした。

「」数体（の絶出・深感）・ pākajotpatti • 伏謗ムラサキ

汝が離し闇して皆の知能を有する者か、人々ざか
イシハシニカ若徒へ取れ】

dvitve ca pākājorpatattā vibhāge ca vibhāgai/

yasya na skhalitā buddhis tam vai vaśeṣikam vidūḥ//
(SDS, Aulikyadarśana, II. 81-82; TBh, p. 32, II. 5-6)

ノの後論廿六 pākājorpatti (燃焼ノムヘト出火ノムエ世質の
生起) 理論ノ闇ノトガ、世質「ベハム直然軸サルの本質—
カトイシハシニカ若徒の pākājorpatti 理論」(『長教研究』

111五中、昭和五〇年九月、pp. 29-50 参照。)

“—アーチカ—若徒は於ハア、世質(guna) Q 115ル
ヒ sankhyā や拳など云ふが、カトイシハシニカ若徒の様
ヒ緘密な理論を展開するにとばなし。おこじかトカトイシハ
シカ若徒の sankhyā 理論の借入であるトナリムル。

Cf. *Manameyodaya*, ed by C. Kunhan Raja (Madras;
Theosophical Publishing House, 1933) p. 241, II. 9-10.

カトイシハシニカ若徒の sankhyā 理論ノ闇ノトガ、世質
ノトベハシニカ若徒の sankhyā 理論ノ闇ノトガ、世質

教側がひ厳しく批判が加えられて居る。これは仏教側は独
自の体系的な理論があるとして認めてない、カトイシハシニ

カ若徒の sankhyā 理論の核心をなす知覚論に対する
批判の立場を取る事である。佛教徒はこの出火ノムエ世質

闇ノトガ、世質を有するやうである。佛教徒はこの出火ノムエ世質

闇ノトガ、世質を改めて發表する。即ち、

ノの後論廿七の燃焼ノムヘト出火ノムエ世質の
生起) 理論ノ闇ノトガ、世質「ベハム直然軸サルの本質—
カトイシハシニカ若徒の pākājorpatti 理論」(『長教研究』

111五中、昭和五〇年九月、pp. 29-50 参照。)

(ア) sā punar ekadravyā cānekadravyā ca/ tatraikadra-
vyādāḥ salilādi-paramānurūpādinām ivā nityānityatva-
niśpattayāḥ/ anekadravyā tu dvivādikā parārdhānātā/
(PBh, p. 270, II. 1-3)

長(salila)等ノトガ、水・火(tejas)・風(vāyu)Q 115ル
ノトガ(prthivi)・地(parāmanu)・場所ノ闇ノトガの輪
回の原子と内屬ノムエ世質(rūpa)・味(rasa)・触(gandha)・
触(sparsa)は常四ドダムベ、燃焼ノムヘト变化ノム。前掲註
稿 pp. 30-32 参照。

(5) 本稿▲に於ハア理論ノトガ。

(6) PBh の原文は次の通り。

yada bodhūḥ cakṣuṣā samāñsamāñjātiyāyor drav-
yayoḥ sannikarṣe sati tatsaṃyuktaśamaṇetasaṇetaka-
tvasaṇānyajāṇopattāv ekatvaśaṇānyatatsambandha-

寺派の異端兒 Bhasarrajā が sankhyā ノ闇ノトガ、世質
聖ペトロ、出家派ノムヘト理論のペトロ、Cf. KA, p.
124, II. 13-18; Upas., p. 311, II. 4-8. リムル出家派ノム
ヒ聖撰カムル共罪、ホト後半のカムル・リヤーナ出家派の
新理論の検証は、稿を改めて發表する。即ち、

(2) ekādīvavahārahetū sankhyā (p. 267, I. 1)
(3) NK, p. 267, II. 6-8; KA, p. 124, II. 4-5, II. 19-20;
VV, p. 455, II. 19-21.

寺派の異端兒 Bhasarrajā が sankhyā ノ闇ノトガ、世質
聖ペトロ、出家派ノムヘト理論のペトロ、Cf. KA, p.
124, II. 13-18; Upas., p. 311, II. 4-8. リムル出家派ノム
ヒ聖撰カムル共罪、ホト後半のカムル・リヤーナ出家派の
新理論の検証は、稿を改めて發表する。即ち、

jñānebhya ekagunayor anekavīśavīy eka buddhir utpadyate tada tam apeksyaikatvābhyañ svāśrayavor dvitvam

ārabhyate/ tataḥ punas tasmin dvitvasāmānyajānām

utpadyate/ tasmād dvitvasāmānyajānād apeksābuddher

vinasyattā, dvitvasāmānyatatsambandhatrajānebhyo

dvitvagunabuddher utpadyamānatety ekaḥ kālaḥ/ tata

idānīm apeksābuddhivināśād dvitvagunasya vinasyattā,

dvitvagunajānām, dvivasāmānyejānāsya vinaśakāra-

nam, dvitvagunajānānasambandhebhyo dve dravye iti

dravyabuddher utpadyamānatety ekaḥ kālaḥ/ tadan-

antaram dve dravye iti dravyajānāsystpādo dvitvaya

vināśo dvitvagunabuddher vinaśattā dravyajānāt sans-

kārasyotpadyanānatety ekaḥ kālaḥ/ tadanantaram dravya-

jñānād dvitvagunabuddher vināśo dravyabuddher api

samskārat/(p. 272, 1-2-p. 280, 1.3)

(∞) もともと「^{アーラブヒ}」の圓の體は、次般涅槃經の「^{アーラブヒ}」
の圓の體は、apeksābuddhi が圓形の狀態 (utpadya-
mānātā) と轉化する。

(∞) apeksābuddhi は、佛祖が VS とせば存在しなくなる PBh
によれば、「初めに輪場」、非常に重要な役割を果たす。この
中觀の介入・選択によって初めて出たる様な性質、やがて
かんだたる（paratva）、したたる（aparatva）

• 1 総論 (dvitra) 等 • 1 1 痘暍 (dvipr̥thaktva) 等

アーラブヒ apeksābuddhi が圓形の圓形。

アーラブヒ apeksābuddhi が圓形の圓形。

relating cognition (Keith : *Indian Logic and Atomism*, p. 187); distinguishing perception (Apte, *The Practical Sanskrit-English Dictionary*; Cowell, *Sarvadarśana-saṅgraha*); fundamental intellection (Faddegon, *Vaiśeṣika System*); distinctive notion (G. Jha, *Padārtha-dharmasaṅgraha of Pragastapada with the Nyāyakandali of Śridhara*); 漢字の翻譯 (金剛正照、『ヘ』の田然御井上; 罪の關係の意譯 (壬辰元年釋義) と云ふ); PBh の圓形の圓形 (庚辰元年釋義) 七重一十六重の圓形。→ PBh apeksābuddhikarana が “eka buddhir utpadyate tada tam apeksyaikatvābhyañ svāśrayavor dvitvam ārabhyate” (p. 272, 1-4-p. 274, 1.1, 本稿註(∞)参照) である “buddhir” が “tām” であるが、apeksābuddhi が “tām” である NK が “buddhi” が “dvitra” の圓形 (nimittakāraṇa) である (p. 274, 1.8). VV が “tām apeksyeyt apeksābuddher nimitta-kāraṇatvam” の圓形の圓形。→ PBh が “paratvāparatvadvitvadrivipr̥thaktvādayo buddhyapeksah” (p. 239, 1.3) であるが “buddhi” が “apeksābuddhi” の圓形の圓形。

- (1) 「**法華經**」に NK は「esām utpattau nīmittakāraṇam buddhiḥ」(p. 239, II. 7-8) と記す。KA は「buddhyapeksāḥ—apeksābuddhiyanyā ity arthaḥ」(II. 1) VV は「paratvāparavadvivaprihaktivādayo buddhim apeksante svotpattav iti buddhyapeksa iti」(p. 435, II. 20-21) と解す。Vv は「**法華經**」の記述を繰り返す。apeksābuddhi は直訳させ、「**法華經**」の翻訳方因(翻譯)を指す。VV は「**法華經**」の翻訳方因(翻譯)を意味する。
- (2) 「**法華經**」の翻訳方因(翻譯)を意味する。
- (3) 「**法華經**」の翻訳方因(翻譯)を意味する。
- (4) 「**法華經**」の翻訳方因(翻譯)を意味する。
- (5) 「**法華經**」の翻訳方因(翻譯)を意味する。
- (6) 「**法華經**」の翻訳方因(翻譯)を意味する。
- (7) 「**法華經**」の翻訳方因(翻譯)を意味する。
- (8) 「**法華經**」の翻訳方因(翻譯)を意味する。
- (9) 「**法華經**」の翻訳方因(翻譯)を意味する。
- (10) 「**法華經**」の翻訳方因(翻譯)を意味する。
- (11) 「**法華經**」の翻訳方因(翻譯)を意味する。
- (12) 「**法華經**」の翻訳方因(翻譯)を意味する。
- (13) 「**法華經**」の翻訳方因(翻譯)を意味する。
- (14) 「**法華經**」の翻訳方因(翻譯)を意味する。
- (15) 「**法華經**」の翻訳方因(翻譯)を意味する。
- (16) 「**法華經**」の翻訳方因(翻譯)を意味する。
- (17) 「**法華經**」の翻訳方因(翻譯)を意味する。
- (18) 「**法華經**」の翻訳方因(翻譯)を意味する。
- (19) 「**法華經**」の翻訳方因(翻譯)を意味する。

(22) NK, p. 280, ll. 5-6.

(21) dvitṛam nūnittavinaśvinaśyam āśrayanākavirodhī gunāntarapradurbhāvabhāve gunasya sato vināśitvāt caramañjanavat (KA, p. 129, ll. 26-27)

(22) TS [42] 二ノニカニ、無穢念妄だ「堅財屬性ゆく」だ「堅財」(nisprakarakam jñānam), 堅財念だ「堅財屬性ゆく」だ「堅財」(sprakarakam jñānam) 24. Tarkādīpikā ad TS [42] 二ノニカニ、福報だ「堅財屬性ゆく」だ「堅財」(viseṣajñāviseṣayasaṁbandhañavagāhi jñānam), 後報だ「堅財」、類等の堅財屬性ゆく堅財など 25. 「堅財無異體」(nāmajātrādviseṣaviseṣayasaṁbandhāvagāhi jñānam) 26. 27.

(23) Cf. Masaki Hattori, Two Types of Nonqualitative Perception, WZKSO Bd. XII-XIII (1968/1969), 161-169; L. Schmithausen, Zur Lehre von der Vorstellungsfreien Wahrnehmung bei Praśastapada, WZKSO Bd. XIV(1970), 125-129.

(24) PBh, p. 443, 1. 2.

(25) PBh, p. 447, 1. 1-p. 459, 1.

(26) dve dravye iti jñānam viśeṣajñānapūṇvakam viśiṣṭajñānatvād danditi jñānavad iti (NK, p.276, 1. 7)

(27) NK, p. 276, ll. 3-6.

(28) ye tu viśeṣajñāviseṣayor ekajñānālambanatvam āhuḥ, teṣāṇ surabhi candanam ity atra kā vārtā? na hi caksur gandharisayaṇ na ca gūrāṇ dravyam ādatte/ ata eva na tābhyaṁ sambandhagrahanam.....

cakṣurghināṇābhyaṁ sambhūya janyamānam idam kāraṇadvayaśāmarthyād ubhayaviseṣayor syād (ity eke samarthayanti)(NK, p. 276, 1. 9-p. 277, 1. 4)

(29) NK, p. 277, ll.5-9.

(30) 二ノニカニ 1. 摘罪 (laiṅgikājñana) 28. 29.

(NK, p. 278, ll. 2-3)

(31) vivādādhyāstam viśeṣajñānam kevalaviseṣayalam banam pratyakṣṭve sati viśeṣajñānatvāt surabhi candanam iti jñānavat (NK, p. 278, ll. 1-2)

32. 「神ニヨリ無體」なる知覚は次の様に解むべし。
「だる、ヒト、體實器皿」など體が知覺された後、
その知覺を補助する観覺輪回しなくて、だだ限定されねば
不得てな如象ヒトの堅財ゆくの知覚が出来ぬ」(NK,
p. 277, ll. 9-10)

(33) tasmat gṛhāṇena gandhe gṛhitē paēcāt tadgrahāṇasahakariṇa cakṣuṣā kevalaviseṣyālambanam evedāṇ viśeṣajñānam janyate)

34. 「神ニヨリ無體」なる知覚の體みな、後半 jñāna-

(後田) ザ CA ヘ匪ハ。

たゞ、二トノ眞ムニニノ經、CA 〇六〇 svaitya ふ輪噶、

śveta ふ輪噶へ」 Vy. Upas. 〇四〇 NK (p.290 1. 1)

KA (p. 134 II.11-12) WV (p. 469 II. 7-10) ザ詮釋ふ註

質、幾時ノ佛体へ難ハ。

(50) śvetagunasamavāyinah śvaityasāmānyat śvaitya-

sāmānyajāñānac ca śvetagunajāñānam jāyate, sāmānyagu-

nām viśeyabuddhiḥ kāryam (CA, p. 63 II. 15-16)

(51) 佛無闇迷 (anvayavyatireka) ザ ハの釋迦 ふるめ

ハの釋迦 (anvaya)、アハ士ヌヨウアハス (vyatireka)

ハの釋迦 (anvaya)、アハ士ヌヨウアハス (vyatireka)

前田壽學「不一一記譜の聖典解釈の方法」(1970)

Anvaya と Vyatireka】『丘山集』第十九卷「佛、留保因

長時川原、アハス—アハス】難題。

(52) samavāyina iti śuklaguṇapatasambandhāt/ śvaityād

iti śuklaguṇāt/ śvaityabuddher iti śuklaguṇabuddheḥ/

śvete śuklaguṇavisiṣṭe pate buddhir jāyate/ tad cānya-

triapi, te viśeṣaṇavīśeyabuddhi viśeṣaṇajāñānaviśiṣṭa-

ddhi ca, kāryakāraṇabūtē anvayavyatirekasañhitapratya-

kṣeṇāvasite, viśeṣaṇasamābandhaviśeṣaṇajāñāneśu satu-

viśiṣṭapratyayodayād asatu cānudayāt (Vy, p.76, 11.

梵トベラハーナ特派の義本 (sankhyā) 電 聖

13-17)

(53) evan ca śvetah śaṅkha ityādipratitau śvaityasama-

vāyasya śvaityagunasya śvaiyyavīśeṣaṇāñānasya ca kara-

natvam ity uktān tathā ca viśeṣasamābandhavīśeṣaṇa-

tajāñānānām viśiṣṭapratyakṣapramāṇaḥ prati kāraṇatvam

iti (Upas., p. 365, II. 2-5)

(54) PBh (p. 287, 1-4-p. 288, 1, 2) ザ次の釋迦。

「難題」(難題) の釋迦、知だらかぬ (難

体の知は生じ得る) —— いふば次のいふを意味するやうの

ハ、アハス——『難題』たゞは有つたるの (難題) 410】(VS 3.1.8 410) ジハの場合は、難題が

知だらかぬ (難題) (成り立つ) の釋迦、性質が消滅する

ア、性質の知覚だらかの裏体の知覚が生ずるやあハ」

(laṅgikavaj jñānamātrād iti cet? syān matam, yathā-

bhūtaṇ bhūtasyety atra liṅgahāvē 'pi jñānamātrād

anumānam, tathā guṇavīśe 'pi gunabuddhimātrād

dravyapratyayāḥ syād iti)

たゞ、アハス—アハス VS 3.1.8 ザ CA 〇四〇

アハス、難題 (varṣakarman) の釋迦 (アハス)、風の難

の釋迦 (vāyavabhrasanyoga) が有つたゞの難題だらけ。

(55) na hi viśeṣaṇāñānām sārūpyād viśeṣasamābandham

antareṇa bhavitum arhati (PBh, p.188, 1-2-p. 189, 1. 1)

(56) K.A, p. 134, l. 6.

(57) NK, p. 289, 1.6.

(58) NK, p. 289, ll. 3-5. 限定期緊 (vīśeṣaṇa) は、
「上記の」、「象徴的な指示」 (upalakṣaṇa) へ異なり。又
は、「レーダ」 (34) 参照。

(59) たゞ、PBn 文中の「限定期緊」の關係」が、「限定期緊
の關係」であるとの誤述」が意味する所だ。又の

「[1]原因」 印緒ノムヒテ留マス。

(60)

註(?)参照。

(61)

Cf. VS 3.2.3; PBh, manahprakarana; NS 3.2.57-60.

(62)

PBh, p. 287, ll. 1-2.

(63)

PBh, p. 287, ll. 2-3.

(64)

○参照。

(65)

NK, pp. 295-314.